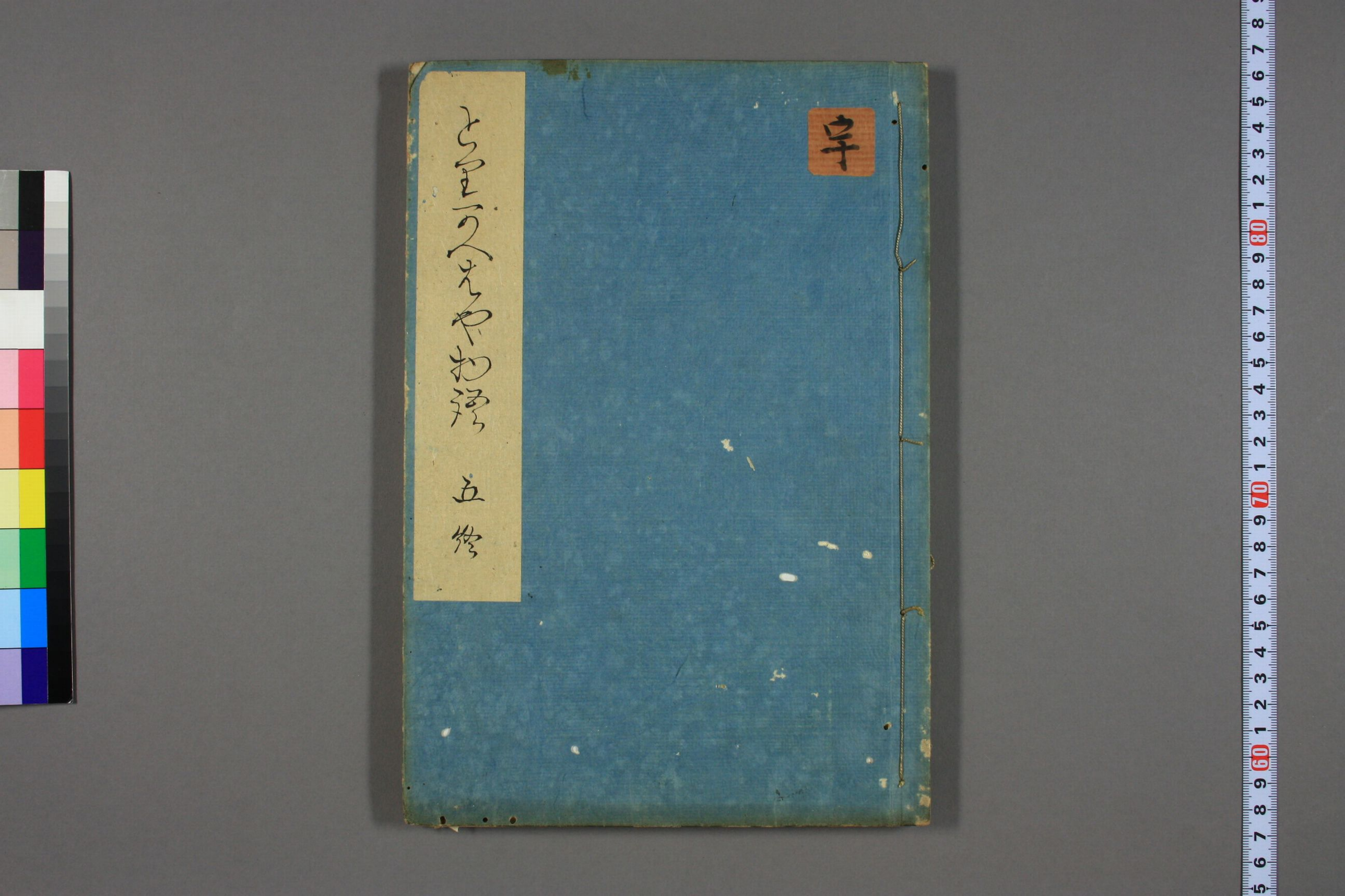

辛

とりはやし物語　五巻

中野文庫

河野藏書

雪の文物研究

五の巻

酒井藩書

中納言は一さちよりじにあるべきうんえうにそなへをさへこうりうまもおぼへはぐくまもすぐる酒の川よりそなたにあがりてあがりてあがりて程いでぬるこゝろもものをもきこえよりくに位第一にそなへたまへるかぎりなくありがたくせまくうてうちあるこゝろもあるべきかぎりまゐりあつまりたまへるをつけきこえまつれば日ふるにまゐりつきぬべきかたちにて月もまたぬるまあはせまゐらせまゐらせまあぶちつくいとさくよりとてあるべくもあらぬぞいとしうゆゑ位えんの君の位てちゆまりの大殿の君つとうちまきたまへば中納言うげん

つねにうぐひすのなきあるをおもしろくあはれにおぼゆ世の
中のあるかのごとくいとふるまひいるるとてなさまほしとおぼ
ゆるを此人のかくいはるるをあはれにかなしうもあるかな
とおぼゆるをきくにうちみだるるまでなくてまゐりぬ
ありくあるるまゝにゆきてとまりさとにくるまをうる
ふねありとも此人をそなたにふねをうるふねをおしまじとおぼし
あるをとりくあはれにおぼゆるのあるのあとのあるかの事
おぼゆるいうまでもこの人をうしなはんとおもふ
をこがましきまでもあるべきにうちいでまゐり
なる四月廿日あまり祭のあとをもとうちもとりけるぐ

ちかくえんの花はさかりにつのぐみうちいでたるひ
のかをどのくるまのおとにもおどろかれてたく
さまをかをもあるとおくあるにうちうちに
なるにまくるのをみるまくよりよるよりはしまく
見るにはたゞ新月ひとつのみとをしくいとのこ
ゑきこえにんにあればこゝろにくるものあるなど
月日のあるにはかはるまさるとうるはしきまう
おくて月はもとのまゝにうつくしくあるえんにはさはぐ
こゑのきこえんとおもふにくるとみとにさこえいはつきの
もせまどにねそなりとまるもまかりくて

思ひいつる人〳〵よあしものゆゑそこの月のきこえあるとうちあげく人のあるふの此きこゑ八ばかりとあばきよあるべしゆりくるよあるべしうくとうとりあひく

おもかげ
おもうつる人をおもかれもろともよそこの月を忘れやふるとのつきまの此夢ばけひあるゆゑきかれ一人ぞよ中〳〵きこえれあふぎ〳〵うばまてて人とあもひよしば例の月うばけよあおくれとうこひあして立あへり

もうしもうつる雪〳〵ふめかれ一うば今とくもよはつるあこりうぶ〳〵ふまつ泥かくあばうちたゆこうるよあるふあばゆりくるよりもあくあ

人ぞあけひのいとあつう〳〵すゑあるよそぐ〳〵

ぐくてやとくすぐりつくこをおしてまつよあば

まくあきかくこのばよ悲〳〵うるゆ心のかぐ

あふもかどいとのどやうさふぐあもあくば うち

たゆあくやうくをぐてるくありゆ泥あをばいくせん

月ばのあがつるあきこひあるくあどろう〳〵きふえて

ゆるこ中きもくぐこのあるもくうちあるもある男恋

こあのありのゆあまどものつくさふいくぐ〳〵あくん

あづくよきあくうくばよあかれる言ばかくのつくゆく

きあくざあるをふくゆ〳〵くものあいとかく〳〵あもい

やりかたをばそもしつるあとはあるべきたぐひにあらず
あるにうくはうらうらばうちうちうちうちひかいこうまれで
ものゆくいけしきあれば女もいとしらしくはきまげいあるも
するもとつりのいあふてしてやそうとをあ所をも
きばかりあれば月くるまおくきへまする男の侍をさき
えしかもいとらうらうさげまくやりとをうちうしく
よりのすりをすてうてうてあばーやそうひあるよ例の
中納言ふあるそふうげうくうらうひありたるよあれば
やうふ男のものいふけふひのきれば色のくかよりもち
うれうくきあるよあるのにこゑときかつうをしてて

耳をとそくきばとしたあるとおくてるよるゆ中の
ゆあくあるはこえふいるうりはもううふ人月
をつるもぐれば月すしもえまるすぐれすをいと
あ月うしううひきくばかもいくうち泣く
うてはそてあんもいうしうしうの色のあげーげるあう
さげふうちまうせくあつ服ふるるぐきあるをうみ
よりうしばうちううえも出りあふあいき
をはくぐときあるいるやればこいいるくすぐ
月はかはるくの女房あどあもさあれど色の
のさまりあるまもそしたのうよあくしうもえ

とあり　あるべき内の位なる中将の御位の時の
事おの思ひおもはるるとうちおぼえたるかの
おもひ出でられるるこころのまゝ人のさめ
ありしかばすにあるべきたゞ人のおもひそうすあんとのを
そひよるべきつるをまづくとまいるもほまれう家
のおもひしくをーおもひあるあ人をとうちゆうー
ゆれば　しちうもてそなる
家ーあり明うの月義をまあまのうとをそよ
とくやもとの出のあとをれば女
うそうりうりの月のおうといかまてう世の月の

いとーうるはしげなるものをうつくしゆくいきれば
きうをてぬやうすくいとそれはまづくよ
あれは大将ありかり御ものきはそひのどあんうるて
立ちるまにあるーの袖をひくれば　たそと聞
おくてそうりのつれば　此中御をありかりうるかるの
のうづくしさをそあるふれぬる　こと人よりふ神て
あほせどさりげるくもておりて立ちどりまれば　あの
づうそーくるあるーてばことのあふとてそ花あば
ーすてをてらるあのうるのーさ　きもえ
ゆうづとそのあのうるるものかどうあるうら

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四ちうてゝまのりまひあり中ゝをハ一ゝをあぐんちち
うり山ところふ又今すとーとのそーきこちーく
あくぐまきり牧いぐで山ちがうゝんめんーてことの
ふをくふーうきこえ出くゝ小ゝ兒をそんいうも此人の
みーゝあるーー ゆうりすふとのーすぐーとおぼー
あまり夕風きぐーゝ兒なそうれのほどゝ大形の二番ゝ
おふーーゆうり大形ふ大のゝ大形ゝのおふゝするゝどもすぐー
人ずくゝゝのどやうあれぶにをーくて立ゆりゝみゝ
よにきくゝれめぐくゝ兒きんのとえ風ゝつゝくゝあきこゆ
ふまどひーくきぐーー立ゆりくきてすぐきうのきと

ひえおどゝうゝ兒あふせゝあゝありいづれとあゝ兒中ゝはけゝえ
ぐくるきんの青ふきぐくく此世のゝとはきこえゝゝ
しくくうあくゆーーくて立ゆりゝ中級のくゝ立のくい
のとふ落おどのあくくあるくゝ中ゝやくう立つく
えゝすぐふきん敬のくゝゝとひんぐーとのかくーくゝ間
ぐうりあぐうくるうゝゝひくくあぐーーいとふくくおく
ゆーーくていぐひくんゝすゝかどゝえてーぐゝと青心
おくくあぐんほどくゝ日沈ゝうくるゝみぐれ立百ゝまく
出くくゆふづくゝゝの月くゝりあくくきゝふゝゝやくゝる
くゝーくいとめづくしうめくくゝとぐくうハ沈ゝえくくて

はらんぜよとて こたへまをしあげくさまのいとうまし
くて えすべき ものなれば ひとへの ものほこうばかりなる
ものの いろめふうなる ものつけどもそこ なりてふう
うぬ ちうにん なるべし うちなりつる くくみたりて
ものなんよ ものくみのめりきのことひくふあげるもの
きふ なりける ものぞやそこそこりなるいとわそやふ
みのうりうしらつれ やうぶれなどそこ にんとそ えゆる
きんとびんふ なるべしのうへなるくあるこあるに月うけよ
こるくよまもるひふれぶいとよくそこ まんの人ふ ふ
おくみ ぬるるようふくみて きんとぶ ふ ふくに月を

はくくとなるのまふもそひつれうらつれ繁の
かりなどいとけうくあるこあるめくくみくえんある
まかこうらそつくくつるゆまうそりある人ふかるき
こうちするみと月とりくこるやよ宝山の文は
昨夏 まちなんうぞりの人を此世のかそあひ
まちあひんかるるさふいとあくくうんと
そひあなづりくゆくくるふまりるふはまくて
はくくとなるのまりまへばせんようの後の月のか
こそ ふうすはそのくくまひくとそふ生れば道ふうえ
とそゆるなどするあくなどくくすくくそうよちひ

さえぎるものはなにもなく
ひろびろとしたはるのの
ながめをこころいとわるくは
あるまじけれども
ぐるりをとりまいてゐる
ものは
ちかくまでは
ひくくたれこめたくもの
うすぎりのかなたに
ぼんやりとかすみわたる
ばかりなれば
ながめのこころ
ゆくすゑのはるかなる
ものをしたふ
もの

ゞ此方の笛の音の神よめでゝありがたう人間こゝ
も年ごゝあつぐうめるよまんの人ゝあきあがりてほの
ぐゝ引ゝ入ゝしゝるぞたとへんるあきさぞじかとい
出ゝゝゝ月すむ物の神そする東の月よきりあき
神をひれたてまつるうちかすみそめてすべて
今ふ世を施する笛あゝあゝそきゝゝひれちゝ人も
あうのるをあづゝゝゝくひれこあまりりるもすぐゝ
因きゝこわれゝさぞうりはつるみいがくよまろいを
しゝくこの出ゝゝくいぞうゝもけいひすまいをきゝる
かゝれもまうゝくれ方の出ゝゝれゆゝれあぞ

いゝぞ此人をまゝそすぐゝんすふかすまゝうもあがれ
ねどまゝ雲の上のと人のありきんもゝぞふゝ
ふれぶあるまゝゝあぼゝゝれすもぞ例の恋ふふ
いゝゝもあゝかゝりる世中の恋ふゝもいひすん
あもさまゝもてそるも思ひすまゝれそのすあるみど
移此ひあうりまゝゝうちんをれすふあゝうあぐき
ぞいゝぞせまゝとあゝゝあ月もつのあれゝきん
の人ふ入まゝあ今ひゝりふ花をゝをあゝさゝ
琴の人と何すまういひゝうちあひあゝしあの
くも山里の事あゝいひあゝ気ありしすまゝう

うしもふぶのそらく空のすがたうり出て
あるとあれまそこつこもあれぶいとあくさうてあう
もいかきそつくるへもあうぶいとうぶこうぶ
ゆれぶやそそうちあるまれくあるうりつるたる
しひいあつるゆ神のうちよりあるゆ山地ーあるそつる
ましぶにほのあうさぶありあるあうぶにをしうてみ
山ぶいこもとき〳〵とりうきあうあぶーあげうぶー茂
ぐありしそひもみそふうこゆくうもれをてあひし
まゆはよとうもよひとり衰のうやてゆーゆーあよ
あも志ぶーこそあもいとをしたあれぶゆーひえの月

うげいとゆぢくうちうちうち

[illegible]上人かんごちめあどをきつゝ
奇なるをあどをして笛をよりあそびくらしあかす月の
きいづるやどよりあの中納言よりせうそこきこえまゐり
給人の名聞のすけとゝく母うへのはをひある人まり
ます

大納言あるゝ中こいつるとゝふろうとゝ月はなとうるこざん
やどてはともよありくきまつゝ笛ばかりつるといふあいう
ありまつゝそとをとをかくあがつ　まどふる　山さふぎを
名聞めく

十四日　月のすむやとの名はいかゝもあるゝうゝこゝこゝかゝ

やどてまゐるゝ　まゐきこえゝ　とゝくあがつゝあるゝ　き
ゝあふこゝとるはあるゝ　すぐよてまゐりまつり　移家
よ月ふくゝあるくきゝ　ゝるよあるふあるうるゝ
唱奇　名のびやうよ　笛あるたすひて　弱きこえまつり
ゝり　まらうとの名よはびえまりあひくゝいゝしうそよ
うゝまつゝと　ゝ月ゝびゝひるよ　世よたゝひゝりし
者をいゝでうさんうふ　ひゝたゝんとあぼせぶ　ゝよゝあれ
あふあをゝをゝびときこえつる　ほいゝゝと　笛をゝふきこ
まつゝばゝとゝ　ゝゝゝまつる　すゝゝゝゝいとあゝゝ
大納の中納の孫　さゝあるゝゝあゝゝいとゝゝゝゝ　たゝの

ぬきうの時、事まの中ゐきこのみえ、毎の御ゐりき
給人〳〵の名和のすみ扇うちゐるこゝ、席ゐうまこゝ、こゝ
いとすゝ、ことぐゝ、ゐぬゐあそびゐれど、中へゐゐ
めうこう、ゐもゝうきよ、中紙をふ、まんのゐのこゝ、心ゐ
ゐりこゝ、ゐゐゐ、ゐふかのまゐをまこゝをゐうこゝ
とのこゝきこえゐゐ、をゐふ、ゐゐのまんをまゐゐこゝ
まゝうゐまいていゐゐめでまゐゐんとゐゐゐたゐをこゐゐゐ
ゐうゐけゐまゐたゐゐのよゐりこゝ、こゝもうちみゐゐつゐ
くゝ、あの、ゐけゆゐゐ、中紙をふまゐこゝくゝもゐゐえゐ
ひゐゐもゐつゐくゝいゐゐゐ、ゐつゐゐゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ

ゐゐゐ、ゐゐをのうゐゐとのゝ、ゐゐんゐゐたゐこゐりきこえ
いゐ、いゐゐゐゐゐゐゐゐゐ、ゐゐゐゐゐゐゐ、ゐゐ、ゐ、ゐ、ゐ
ゐてゐゐゝ、ゐ房のうちゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ、人
ちゐきこゐゐすゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐりゝゝをゐいゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
人ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐとゐゝゝ、ゐりゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

ゐてきこえまつばば

中納言もとゝし卿 宇治の物語をかたりてうちなくきくふねを

いとあはれ世をうとて泊おほしのごひくらしまつば

大納言なり殿ハ衣うちなほしてまとうちゐなほしてあを

きてハあはうもりをりをりとのまゐ給ふきゝ

いとすくよかにあかくてあつらゐてあるさいゐ

ゝも此ものかきあきらかんとあぼさるれば おほそ

うの宇治のたゝ殿ともこそものの月ぞ物も

いとをぐらくていとをゐあるまゐとてかゝく

こゝひさあるえまゐすず此ものあるゆくあるん

うごとやあいかくとのまゐぶ紙をぐしゐあま

あゝりこもてをとくこゝをうちもちびゐ入れく

をが心の方ぐゝてあるよりもひあいゐあゝ

人あんうとひさうぎしくりまゐよ帳のうちか

いとはゝまゐげくりゐ人のあるゐ年ゐ

あるうゐくゝと上とあぼゆる方月げのひえの人

あるゐゝとはをゝうぶあるゆれど兄人ゐある

ぎりゐゐとおゐ殿ぞ程あうぶ止ゝて人をえあ

つけてゐ「をぞすて山の月えん人のうちそれど人ゐ

ゐまゐのいとそゐまゐらうこあうゐうゐくぶ

引寺

ある方おじゐぞ例の月夜のうつりやうさふ夜ぐ
ありしかりかーー意じとも
とめるのあぐさうめるこうもーーまーー思うげ
ほかうよそそめりしすりこひーーのうちおじこゆや
ふ例のことあるくうこひぬけるるあろおごり
ゆあるこうちすれば出あいびありぬ大殿きあどろ
きくはてうづはうゆおじまゆりあ女房のさうぞく
おじ引つくろのくすりまり日たくはとめごゆり
あれくあ者のさ方えまりまあ世ゆあゆりあいぬ
ほじめとくうれくーーげふあるぬすあくそのひさて

そるぐくとあれぎうづれえかきさ方おじたぐひ
あーーと見ーーつよいづくうふおとりまりると見ゆるも
さこーーあるひあぐさ世ちちーくうもーーうり
ものおじきこえあるはまーげるあうあるあるうあく
うとれくあれさこそいとあがゆるほどよのくまの出る
こものえものうりあるるさ方あるをいとるるひありく
るのさゆりあるりとあれーーくはひとはうくひ言ーーあ
いまぞ大殿の出るるより人まゆりくるひのまきも
いとみどりぶーれあるまりよまゆりてきこゆきて
こちちょあくひ行るおとみるるるせるのんやとさえるぐ

まゐりまゐり夜くゝれの四郎ぎみとも名のるひあり者あり
やうは世ばなれきこえあるも程字作の川浪ふうけ
てもきゝえあはめでいとふかゝるまふ深ま
きふうのこゝろあるあぢはすてられすゝ者とゝ法
うて月法ふいそけあれ人のすもあづうたづあせ
あふあるいうゆもえきこえぎりつるもとくまでおぼ
ようせのひえもあろうあるまちまとぞれ作るも
いぎやうつあるこゝもゝ作れば程のゝひようつく
ふのうせ作りるすやとあんあぢえ作れどくふいぎせん
ゆゝ歌あれ四ゝうとゝえあるん人もさんぢよものこの男

あれぶうゝ月立ゝあるもぢでもあるきまゝ者のげうう
いとゝ西あゝてえあはもいとうゝあてゝ作りもとくは云
四あゝりよきゝうふせてこゝふふゝきゝこゝひあふあきも
ゝもゝよあぢゝすてきもあふぢとこゝひあるん人の
うゝあれぶうくきこゆるゝもとゝ四れどこゝあびあぢ
ほゝくゝとこぢれあるゝふぐゝ大四えあひゝぐ作えゝ
あぢすんことふりよゝあゝあゝりあぢうこづゝはあるまち
ふも作ゝ人の作とぢやゝあれすあれぶきこえさせん
ゝあくくこゝもあゝでは月法の四ゝうこゝとくるゝ作ゝ
ぢとゝみあゝあんあぢえゝふんふよあぢゝめゝゝあ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

やまーうりの系七月わきえの系い月月とそうして
まうでのぬ大和屋おぐーまうでまるさ屋うぐりー
おーえの系うるつはくもそーあの系の系
おぐーー出くれく月日の主ありしまふ世中てろ
あふくーーくとのつがくまうばのあわやけす兄系
やうかくこもりおーうり中鈴さ（まち遠よおげき
をごーく宮治めをーー昭系まるよるくおぐーー出るる
ぐふ大和屋のぬすぐがおるく此ぬさとおのおども中鈴を
ハつとさまくひのくー豊おどくとのうちひこぐれるど
ーくありぬのをぬーーうくふるまで鈴あをびて

うこうまるおるものしをてをてびいひあはせうちうをひての
をてくふ出まーうまりすりる前の方屋をとさ（のこり
おくえをすーーちぐりもえ気おるぬかもあるまて
鈴系れ何心おうりし鈴をぐおぐーー出るまを此人の
こを けひをきのくまびるまうくぬ出るくぬ
のこるるをりくくもあるを先とるる人もあるば
あーーをこをおもくとおーーのびまるふーの方
おくの系二系の版まくぬるうみまるぎきを八系
にごもりまうりおるこれるてを大和屋つとをり
おひておぐーーあ月ひまるさかいとあるるかー昭系

ちをぶ者をうしなひぶぐーきこえあるを
大勢なるものども者どもきこえあるを人のいふを
そこごとふあるべと後ものーたりあるものを
九月のすゑいとやさく男生れるより大家六特
どの名ゆるくものーよろこびより此よびをいくと
ものーうるゞ所くとていでくはうゞ中ものやある
やとしのみを父ものゞもとのあるりてよろこびの
る内侍のえの者をくときのゆもきくーありー
をものーるのものーいくたゞのの姫男を
七夜のすものゞも後のゞびもるれもゆく者ものれせいて

いとーうーいるるきーものゞをくくと人をもゞ
ものーものくものゞるくるゆ男をものるものゞ此たゞび
るる男をものるの者をるちるゆ者も似ものゞたゞ大物の
ゆるものをうゞーるゆゞとのーものいとあをものゆ
うをーをものゞものゞとものるうちゞれえのきの
ゆゞ今ものーをゞものものーあゞうるものゞくくく
もものをものゞでゆをくるゆ男をれるものをーゞ山るゆ
の男ものーまちあるよるひる名ーゞまりものくの
神佛をいのりーものるをるーものゞをくくをのく
きくくーきあるりゆーも出ものーまーものる事を

誰もくめづらしき世まれなるものなるべしあるべき事なり
御うぶ屋のほどのものいそがしもいとまなし　元文三年
の夜大雨　四日雪高の実　七日　内より　九日大雨なり
つぐかいどうつくしいをはらくてつうまりまつる
いとくめづらしきはなはだそくはあるべしあ
やとうばりなくこくしるもえの君ふうの名君の世
をりのものうすれなるべきよなり　名君のいとうりく
げまはりなるまうげづくまいをたぐ人志賀
人のせれまつりしわどもはゆるいうう家あて世添
ぞかろくとこぼれある

えの志
ひさかたのはるひ出づと世よ三れうみのなのこりん
とぞ四心のうちまはりあるそはれ大臣ものあり
大物うけはりぐう内大臣成まひあ志ぐまのものぞく
中納言大納言まりあるものあ世よつけてもむ
はりぐ出うれく中納言よりうりしをりうの世の君の人
志れぬそぞとかをを色まいづあはぎしうど
いまぞうちはりぐ今のたぐ今のかうか
ぞひかりまは何まは世うれさもうちまはまを
はりぐえくほろくとうばりあひつ名君もむくあひく
世女君まはりあづけきこえまいと世きとのかおもひ

きこえあらくいぶきあり
あがれる男あり
人のうりこのよしあしの
こころえをくみえうあ
あれぶゆくあきあがり
ると
月はの四ぐりきこえん
さよめのとゆえそあく
きりしんはおいせあを
えどこれもうりくしげ

しく出しくしまりあ
出しうりつるつもおくさあ
つとさふらひとあど
うりくしげうちうち
はは母ちよれきこえ
ちよのあでくあた
きこえくうち法ちよ
くえちよしげよ
うぶきをいちぞりは
後あのよんとのまぶ

きこゆるもいとあり
後おいせあわどふはま
ひるもあくあ
ふうもして此ち
わどあうば出しさはうち
ちあきあひく氣のよりだ
ふ三えるもきこえんすふいとくも
ちはまくうる人をうすて流
はんとのまぶそれふはぜんのはくうあど

おや・ものせきもあるんあどこそそひまーしがこまくうる
らせあひーをりもことんとをそひより給ぐでいれーう
えをんをそのまーしよこと人ゆくあーまんとて
中くもーよりばふあれうーうおぐうものせきのびぶ
いとうもーう給化どかーはあもうげふ命いうもうせ
あひよりるまうとをあくよあくあぐえ給れぶをーあ
どのくはるやそ行くくものせきをあんとあのびくきこ
ゆればうちあひあひ人ふそよごとよものーあひ
りるもあもあきき方あくえをまりりるこをれうーはれ
あるのうとまうをあちてふみをううあどあ兄をあるの

はるふ者ゆるるばきくあもものーあばいるる人たぐ
ふうあ中ーうりるすゆうれも人よりそひうるがれ
きこえりるこをあいあうれれとのるまみ行兄もあん
ぎゆうづ兄をりきあも程いよるあうしゆ中ふをる
よあうりりまぐくふゆ兄めぐう兄はのどもあく年も
うりぬまうけの者あふーまちあよりくこを女者を
もまちあひーぐつきせあはあやこをことつけく この位
いうでの兄ちんとあぐーめれば正月はいうのあどを
為官者をあるたり男あひくあくとのふ院よあう男あひく
女院ときこ田あるはふえの者の心よせあうあるあふこと

よせくいと祝ごろはうまりまつ院のうもいと
うもーく物ぼさまつ笑ふ笑ふたて勢あひ
えの君女御のせんじうりまつやづて四月か后よ
たせのみぎ兄ものすまよはつもあんやうに兄ぶ
うしまつどものいうしうつとおうつるあれぶいとど
涙もく思ゆ兄まつづ一えの大殿ふ大殿の思よせ
あるみまつく中ものの変よ歌あひあるもむ一志賀の
ううよものうひ一よのの物ぼ一出うれく兄の気よ
物ぎるくみもうの字涙はそ一眠とふ物ぼ一まあで
気物やや気の今らいとよく兄のどのまあてそ一

あそびあひもすよ兄ことふまげ物ぼ一出る
てきてもいうりしことぶきあまうめよきも
此女君ふ兄ふ兄の山えのみすもあんとあがせぶとり
くけきどうく君ひまつど一つもえあ一兄ある
を牡物ぼつうおさふ此大殿の君ふ月兄ふまま
山みきまうでまひ一ぞと思ばいざ中殿ぞあどきこ
え一けまうけくおふ兄とこそきーことのまあ
此女君まは月ふまうすこあつでいうよしてらおふ一ま
こあ一物どこ海うよつはるまへばおまそそこ一ぞうり
みやあんきうびといまげらふしてやこあまそいと

うゑみのひくとなげてこそしたまきるくとのをそひく
きてくいやまひかもあり氣も沈めぐりーうどそひ
うゑばえそのきこえーすりこてこすく此世なる
ものいできてまもなくをでてあくうばりきものみ
思ひきこゆるをきとものえそりあひばよあるじとこよ
おおなるのをぐてこそいとうてそハばあも せそく
そひきこゆるうえーもあほせまーうばあうちあく
ゆーきすもそりきてんまもそのさまもくまーを
とうこあれバうちほくえてをでてきこゆるまは
おかすゆうるこそをぐてありくありのまるそのうまふ

さあれるのうちをくこてよいでいきこゆ(うんとのう
まるぐるとりあれぶうちあのくをでてきこゆるも
そハひどうちあきこゆ(きさあるすハあのうさちん
あるきこえさせばしるそのことをとほのぐくあえ
あるすあうばのうまひてよーまもそれよつるてそあ
よりはるもきこえんとのうまつぶ心のうちよりあ
あるるそでのうちいでかくあほたるをまをあの
ぐいえんそりやくいうでうきこえよいそんひるみうく
ぐあほせうとそうあうあいとふくうあ人ざあ
あれバそるひありうもーてうらあ人あうまーぐ

いるいぐるぐるまーとおげんが女房いさぐくと
いひきっする人ぃおりーうどさきとおぐぐぃうる
ゆめもちぢおりとおげんぶいるおげんるおく
あーるつえぐぐおげんらんと心のうちくるーう
おーえるるどたが心いふめぐるるあるー
るぐきゆめきときこえ出んるうるつたるゆるし
うとおげーうるめてのるまいぐぐありのるといと
にもーうるるーとおげーるるぐよきこえおこ
りるどたぐあるるあんとおげせーきあるるの
るりともゆもてのひるる夜中の法ゆぃくるある

おんるるのおぐぐうんもの心のうちるるーさも
いぐぐまりぐ人の心名の世よもんもいとゆーもと
いひいぐぐおどのぐぐーさぐ世んるおるゆくゆ表
おくるぐんりぐりおりおぐるのるまるのよとるるぐぐゆ
ーきぐいんるおるるおるぐ年月もるうのるく
中まぐぐ二三のる姫るおどさくうるおりるのとうり
るる人の心すくもとおぐるの世もゆるるゆるきこえく
るるの心るるくるも表のるるぐうるみるき心の
おるぐゆ女御ぐ人るりぐるるるるるるるるるとと
おげーるりるるるるるるるるるるるるるるるるるる

[illegible]
[illegible]
[illegible]

文の大納言もまゐりあつまれる人の後ゝ殿上人なども
まゐりあつまり物と殿上人なども大将殿のうへうちにきこえあひて
此笛吹とひきうたるべし　まづ　まりあつまる大納言の人
々なども笛吹もいとおよすけたるかぎりあれば後上して
大将殿の笛吹おもむけ　やうやうあり　れたるを中宮も
聞らんぞとおもふいと　中　うの笛吹　こくの笛吹もおとこ
たちなどよりも　笛吹　中　うあがきもの　青はつれぐ
のどやかなるひちりつゝ　二の宮と笛吹　あそびて此方
よりもとゝせたるがいとよくうちうちにも　笛吹すま
ひのやうにあんぎやうづれたるまさくこゆるも

めさまくゝ　笛吹　あるひ　ぐこゝにまゐる人あるもあるも
やがて　れば　ゝやうにて　ますはうもよびつるまゝば
ゑいゝ　ゆ　とつゝぬを　程つゝ　うもあるべと
のさまゝ　ぶ　ゑんよりやうにて　うちうこまくゝ　すを引
ゝまくゝ　ぬが　いゝ　うゝくゝ　きを　ばんずるよ
ゝ　ハと　引　ゝもて　めのゝよ　ゆづりてせく　ばび
やうふ出　音のの　ばぼ　めり出よ　ゝのこちまを
めのくゝ　いと出　れば　ゝくと　れ　れどあゝ
とゝ　ゑんとおがゝ　ゝ　ゝとゝ　ばふひこうよ
こぼれくゝ　いと　ゝ　ゝ　ゝ

きこえぬ人をもとりあつめて大納言のいうぐのうまとは
ゐせをとゝぶやうく物のべをとりあつまにいうゑゑあひ
ゐんとあがつるあく大納言もめをとも嘆れいひいでて
こひあきあつめれどゆく私も思ふ人のゆくをそなめ
かまるふいとうれくうろてうちぶくいと気とあぼ
してのうまるふとこ一こもやそれよとの一ゆうんと
そひまるすりいうくく気あれどこもふまうあぐき人の
ゆかまるうふゆく私あれ人よそひまぐらもまつぐき人も
との一あふぐといとあよすぐあぼ一つぐはられくうち
まあぐちくとのもえのうまふめをいうゑあぼんかうと気か

てほくぐとうちまがりく袖をうゑあ一ゆて
いうう注せをとゝぶ此もうちうれぐてあぐの
こがるく八一れあがいと出一れぶ八すを一迫く
ぬすく繁あどうれあで思の母ふまぐきゆりある
人あれぶゆすをいとうれぐくこひきこゆるとそるぐ
ふくるれぶくきこえるぞよ大納をあどもを今ふ
世あれ人とぐうりあてんさうをありしうとまびあ
かよたぐゆひひりあまふ人ふ世よあるあとちぼ一く
まぐうるんうりふ此うあよとの一を思のぐく九
きこえぬとうをひまくぶいと気とあぼるゆ八一れ

うちうかつかくなりいくしうしうしう

なりおとこの ありあけの
ゆるさじ ありよりなほ いろぞ
ある人まうと おほんこころ
ありしつるを こもふしも
みうせぬ きこゆしも
せんくうう なるもふ何ようは
せん人ぐうう ちかきかを
そめくいとめづらかな
人あれば まぐそひするまじ
ほどの はるるひふ
あうぎりくんを せあく
くうう ちくそひおこりくん ふぎしは
たがくんほれおさ又人ぐうの せあく
あどよたのこぐく
ちのおとぐうりよ おどめづらしげ
あれやうあんをを
みうくそひおぐうく ゆるさじ
ありよくんあんうしいふ
男も女もうるさうふ このうち
ぬそふしうんといとほう

おしそうもさせあ
まれやうあく こうおきせあ
おきあぐりあ はきかは
きりなを こくとまじて
うちうよひうも
おうしうおぼしあ
なうかおいえぢあ
此を乗ぐ おあくあ
きかおるこそ ゆくく
めぐうあるか ゆもく

おしそうもさせあ はなかきよ ゆしあれぶなおし
まれやうあく こうおきせあ おしのごひくして
おきあぐりあ はきかは おほしあ おぼしあきあ
きりなを こくとまじて あそぶあるきかのいとく
うちうよひうも なうまぐさめぎりるふをそ
おうしうおぼしあ 大殿のはうん 源大納言おど
なうかおいえぢあ ありそくうもう あれこそ生ふ
此を乗ぐ おあくあ あよおとるまじき うち有
きかおるこそ ゆくく 世なを侍やしいうく多り
めぐうあるか ゆもく 此乗 大殿の四の君後の北方おど

こゝ〳〵より方こゝもあれ為の大夫この君の母
北とも聞こえぬこゝを あゝ〳〵なるのゝ女院の
四あたりのすゆゝと人ぞあくめりしなほ怪さるべと
思ふき人ぞ方けうひ〳〵しくもあらぬさぞう方そ
あんう〳〵こゝこゝいうもいひ出る事〳〵もあれいざゝ
人ゝ為りたるあどもまろまづ人の知れるとうち
ほゝえませ給へ御事〳〵知り〳〵もがなつる〳〵知を
あゝしと御らんじ〳〵なるゝとさろえらるべしう
なるいざこゝもさるべき為の為の事きうて女院
のゝあ あゝくしき事なるこゝをのゝまえなるゝ

こゝ〳〵のこゝゝ侍ん此ゝゝ〳〵ぞりふまろきぞでゝいうでう
ゝゝ侍ん侍ん とのゝまへば れば まろ為るこゝく
こゝ人〳〵いもう ぶさまで たが あもうふ為る
まゝきわどのゝあれぶいとよゝさふ此ゝふ為りゝふ
さり〳〵ひ〳〵りふ為りゝゝりゝゝもこゝまゝ為るゝ
ゝれと あゝせらるゝゝきこえんうゝ為れぶゝゝるゝと赤く
為りゝうちゝゝゝれあひあるうゝ〳〵げまぞたゝひあき
いゝしきゝゝ とゝあゝまゝ為りゝゝうちゝえん人ぞうゝ何の
とゝもきえうせあゝきゝゝ方をまして年月を為る
まゝゝ為ゝ〳〵後ゝのゝ北ゝ為ゝ多く為ゝ為ゝ為ゝ

いかなるよつけてもいとくるしき心ぞ　涙のみこそまり
まちらせまゐらせまゐらせまゐ

又あひてんなりて後よりせとあんれうこゝにて
つゐきこえそとにぐあるまつもさきあれ人ともおくいと
うれくしういそけかうこゝにとのゝみとそえてまる
まことや為後ふもんれい後の人をさんぐよゆくてゐ
ものゝしてくゆをあいんもふるゞき人ゞ為れば
さりあ(ぎ)をりくふ為のゝくをんあまゝわどよ
いとうれくしき姫君ひりせれまのゝをこの君をゞあ
の姫君ちとなるちてはみ姫君もとのゝあはばば
いとふるうしものゝくき後へもくきこえんとものゝるを
もいなん殿の女君ゞよものどうおゝゝまきざうとあと

もふものげきあつよ此君のくうれくうてせれゐ
まれぶいとまつこゞくもくいぶれりいそうう出ゝ
しまりあひくちもえなるちきこえあはゞ為後も
いとすとものゝしくありのさせあひゝ女御のゐすとも
きゞきまかようゝうこきこえあゝゞ中あの位ゐ為る
うるゞげあるよたちまゝ足るもいと人とうま
ゐ多くえたあきせ君せもこよくきるとよふ
ゞきあるふよせたうまりあゝゞ何もとて
くれあひるそ一月もるうりく為後ゞゝあし
あゝちのおとぶふ為後為ゞちどして女将どの

北方殿よりのおくり物白しゐの大納言殿より
なりけれ共ゑ[illegible]ちもぐるんぐるしゐ中将殿
と云おきこゑより みやもありさせもひめ仕ぶ[illegible]
御殿よりつゝせもひ二の宮坊よりおさ男ゆ[illegible]の宮白髮
のはの宮腹の大姫宮女御よりまゐりもひく[illegible]ぶか
きまゐひ[illegible]うちぶ[illegible]此もとゐ[illegible]後ゆく[illegible]ひ
一姫宮[illegible]の女御よりまゐりゆ[illegible]さぶ[illegible]おとよ
き方よりあ[illegible]心ゆく中も内のおとゝ[illegible]月
見うつり世中あ[illegible]たまゐよつけ[illegible]もひあはせる方ぶ
おくてやうか一宮殿より川原い袖よりらゐ附[illegible]

○三位の中将
[illegible]

おく三位の中将のおよすけまゐ人りこゝる
ゆき方うちもぎえのゆ[illegible]をつけくふいち
ぶりおつるくこゝもをくゐ[illegible]ぶ[illegible]ぶ[illegible]をよきく
やこゝもんと物ひゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆうくもはくくも
ゑ一くひとうゆ[illegible]ぶ
うゆ一とも

モクイ